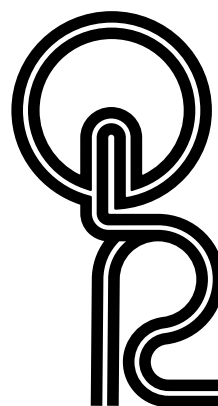


QR Newsletter

第四紀通信

Vol. 12 No.2, 2005



日本第四紀学会・千葉県立中央博物館共催シンポジウム「ナウマンゾウのいた頃」終了後、展示室にて、樽 創氏（神奈川県立生命の星・地球博物館）による発掘標本についての解説があった（撮影：吉村光敏）

Vol. 12 No. 2

April 1, 2005

2005年合同大会プログラム・・・2	国際会議・シンポジウム・委員会報告
地球惑星科学連合発足へむけて・・・5	・・・・・・・・・14
50周年企画のお知らせ・・・7	紙碑・・・・・・18
2005年大会案内（第1報）・・・8	評議員会議事録・・・19
発表会・講習会のお知らせ・・・12	幹事会議事録・・・22
	会員消息・・・23

日本第四紀学会

Japan Association for Quaternary Research

地球惑星科学関連学会2005年合同大会

地球惑星科学関連学会2005年合同大会が下記のとおり開催されます。2005年合同大会には2300件余りの発表が申し込まれ、会期も従来に比べ1日長い5日間開催されます。この大会において、地球惑星科学関連学会連絡会を発展させた日本地球惑星科学連合が発足しますが、地球惑星科学を学際的に盛り上げていく場として合同大会の意義は一層重要となります。みなさまの積極的な参加を期待しています。

期日：2005年5月22日(日)～5月26日(木)

場所：幕張メッセ国際会議場

大会詳細：<http://www.epsu.jp/jmoo2005/>

確定プログラム公開：2005年4月1日(金)

事前参加登録(割引料金)締切：2005年4月13日(水)正午

第四紀関連オーラルセッション(一部抜粋：*は日本第四紀学会提案)

日	時間	セッション名	会議室
5月22日	10:45～12:15	コアが拓く地球環境変動史	201B
5月23日	09:00～17:00	2004年スマトラ沖大地震・インド洋大津波	国際会議室
5月23日	13:45～17:00	都市域の地下水・環境地質	101B
5月23日	15:30～17:00	長大活断層のセグメンテーションと強震動予測	301B
5月24日	09:00～17:00	2004年新潟県中越地震の地震テクトニクス	コンベンションB
5月24日	09:00～12:15	沖積層研究の新展開	202
5月25日	09:00～12:15	古気候・古海洋変動	302
5月25日	09:00～12:15	活断層と古地震*	301A
5月25日	15:30～17:00	第四紀*	302

各セッションのポスター発表は口頭発表と同じ日の10:00～20:00(コアタイム 17:15～18:45)

日本第四紀学会提案セッション

3月12日提案のプログラムです。最終版を大会ウェブページで確認してください。

セッションJ042『第四紀』オーラルセッション

5月25日(水) 15:30～17:00 幕張メッセ国際会議場 302

14:00	亀谷裕志.....若い堆積砂に生じる時間効果
14:15	山田和芳・高安克己..... 島根県東部、神西湖堆積物に記録される過去2,000年間の古環境変動
14:30	興水達司・京谷智裕..... ..黄砂飛来量の周期的変化と花粉飛散量の経年変化 - 富士五湖湖底堆積物から探る -
14:45	篠塚良嗣・豊田和弘.....過去4万年における琵琶湖コア中の重鉱物の運搬堆積に関する地球化学的記録
15:00	大石雅之・鈴木毅彦..... 斑晶鉱物の屈折率を用いたテフラと溶岩の対比の試み
15:30	宮入陽介・塚本すみ子・横山祐典.....RTL法によるテフラの年代測定 - AT火山灰試料を用いた検討 -
15:45	山縣耕太郎・植木岳雪・森脇 広・久保純子・吉山 昭・町田 洋.....富士相模川泥流堆積物の層序と岩相変化および成因
16:00	植木岳雪・山縣耕太郎..... 富士相模川泥流堆積物の流下温度、堆積様式および成因
16:15	村田昌則・鈴木毅彦・中山俊雄..... 武蔵野 台地東部、杉並・世田谷・大田区地下における前期更新世テフラの層序と地質構造

- 16:30 田村糸子・山崎晴雄.....テフラ対比に基づく飛騨山脈の隆起：呉羽山礫層の南谷2テフラ，室田層の佐布里テフラ
 16:45 鈴木毅彦.....火砕流堆積物からみた阿武隈山地北西部に分布する小起伏面の形成過程と年代

セッション J042『第四紀』ポスターセッション
5月25日(水) 10:00 ~ 20:00
幕張メッセ国際会議場 コンベンションホールA
コアタイム 17:15 ~ 18:45

- 1 鹿島 薫.....珪藻分析によって明らかにされた南極リチャードソン湖沼群の環境変動
- 2 奈良間千之・塚本すみ子.....キルギス共和国，テルスケイアラー山脈における氷河堆積物の OSL 年代
- 3 近藤玲介・塚本すみ子.....OSL年代測定によって推定された利尻ワンコの沢・利尻豊徳テフラの降下年代とその意義
- 4 松浦旅人.....第四紀後期河成段丘を指標にした東北日本中部地域の隆起速度と短縮速度の試算
- 5 中村洋介・瀬戸真之・島津 弘・栗下勝臣・早乙女尊宣・出町知嗣・岡田篤正.....最上川中流，五百川峡谷付近における河成段丘面の編年と常盤断層の平均変位速度
- 6 吉田英嗣・須貝俊彦.....24000 年前における浅間火山の大規模山体崩壊イベントの復元
- 7 松島紘子・須貝俊彦・八戸昭一・水野清秀・杉山雄一.....ボーリングコア解析による関東平野中央部における中期更新世以降の古地理復元
- 8 鳴橋龍太郎・須貝俊彦・藤原 治.....堆積物の物理・化学特性を指標とした桑名断層の活動イベント層準の推定
- 9 岩本直哉・井内美郎.....Environmental changes during the last 400,000 years based on TC,TN contents of Lake Biwa sediments
- 10 井上直人・吉永佑一・原口 強・井村隆介・江頭庸夫.....鹿児島湾新島における重力探査

セッション J027『活断層と古地震』 オーラルセッション
5月25日(水) 9:00 ~ 12:15 幕張メッセ国際会議場 301A

- 09:00 楮原京子・内田拓馬・今泉俊文・宮内崇裕・越後智雄・松多信尚・石山達也・加藤一・佐藤比呂志・越谷 信・野田 賢・荻野スミ子・池田安隆・野原 壯・水本匡起・森下信人・高橋就一・小林 勉・氷高草多・野田克也.....反射法地震探査結果からみた横手盆地東縁断層帯の地下構造
- 09:15 水本匡起・今泉俊文・岩崎孝明.....ボーリング調査による庄内平野東縁・松山断層の完新世変位速度
- 09:30 高橋就一・水本匡起・今泉俊文....長町-利府断層と苦竹断層(新称)の新期の活動
- 09:45 渡辺満久・鈴木康弘・伊藤武男.....中越地震の断層モデル
- 10:00 宮下由香里・吉岡敏和・小林健太・二階堂 学・高瀬信一.....古地震から見た牛首断層のセグメンテーション
- 10:15 太田陽子・寒川 旭・鈴木康弘・竹村恵二・本田 裕・向山 栄・馬場俊行・細野浩.....鈴鹿・布引山地東縁における活断層の最新活動期とセグメント区分に関する検討
- 10:45 岩井雅夫.....室戸沖南海トラフ陸側斜面海盆の完新世タービダイト
- 11:00 Besana Glenda・Daligdig Jessie・パノールマイラ.....Results of Trenching Activity Along the Guinyangan Fault, Philippines
- 11:15 武村雅之・神田克久・小松原 琢・西山昭仁.....震度インバージョン解析結果から見た寛文二年(1662)地震に対する2地震説

- 11:30 福山英一・三雲 健1891 年濃尾地震(M8.0)の動的破壊過程
 11:45 行谷佑一・都司嘉宣・伊藤純一
 文政越後三条地震(1828)および宝暦越後高田地震(1751)の詳細震度分布
 12:00 石橋克彦・古代・中世地震史料データベース化研究グループ
 日本の古代・中世の地震史料の校訂とデータベース化

セッション J027『活断層と古地震』 ポスターセッション

5月25日(水)10:00 ~ 20:00

幕張メッセ国際会議場 コンベンションホールA

コアタイム 17:15 ~ 18:45

- 1 伏島祐一郎・吉岡敏和・宮本富士香・三輪敦志・宮脇昌弘
産総研活断層研究センターによる活断層データベースの第1次公開
- 2 越後智雄・小田 晋北海道羽幌地域における第四紀後期の活動性
- 3 吾妻 崇・奥村晃史・後藤秀昭・杉山雄一・寒川 旭・黒澤英樹・三輪敦志
黒松内低地断層帯・蔵山断層の活動間隔
- 4 内田拓馬・宮内崇裕・今泉俊文・越後智雄・松多信尚・石山達也・佐藤比呂志・加藤直子・木村治夫・萩野スミ子・越谷 信・野田 賢・池田安隆・岡田真介・加藤 一・野原 壯・水本匡起・楳原京子
変動地形・反射法地震探査からみた横手盆地東縁断層帯の活動性
- 5 杉戸信彦・今村朋裕・服部泰久・末岡 茂・山本晋也・岡田篤正
中野市草間地区における長野盆地西縁活断層系の群列ボーリング調査
- 6 石山達也・水野清秀・杉山雄一・須貝俊彦・中里裕臣・八戸昭一・末廣匡基
綾瀬川断層におけるP波反射法地震探査
- 7 石山達也・戸田 茂・佐藤比呂志・中西利典・杉戸信彦・松多信尚・今村朋裕・服部泰久・天野桂悟・鈴木規眞・堤 浩之・岡田篤正・井川 猛
養老断層におけるP波反射法地震探査
- 8 宮下由香里・田中竹延・市川清土
立川断層の最新活動時期:瑞穂町箱根ヶ崎トレンチ調査結果
- 9 宮下由香里・小林健太・高瀬信一・二階堂 学・尾尻敏彦・橋 徹
牛首断層東部および万波峠断層の活動履歴
- 10 道家涼介・竹内 章Geomorphology and geology along the eastern Ushikubi fault of the Atotsugawa fault system
- 11 松浦旅人・吉岡敏和・古澤 明
富山県東部に分布する高位段丘面の形成年代と魚津断層帯の第四紀後期活動度評価
- 12 山下 太・久保篤規・小村健太郎
稠密TDEM探査によって推定された跡津川断層クリープ域の浅部比抵抗構造
- 13 服部泰久・岡田篤正・小松原 琢伊那谷南部の活断層の第四紀後期における活動性
- 14 山田隆二・松田達生・小村健太郎
野島断層平林掘削コア試料のフィッシュン・トラック分析
- 15 近藤大輔・宮田隆夫
3-D GPR survey for the Nojima fault on the Awaji Island
- 16 杉山雄一・宮下由香里・小林健太・佐藤 賢・宮脇明子・宮脇理一郎
鳥取県大山西麓の低活動性断層(小町-大谷リニアメント)のトレンチ調査
- 17 小林健太・宮下由香里・杉山雄一・家村克敏・佐藤 賢・大橋聖和・大川直樹・萩原知之・坂 啓惟
鳥取県西部, 低活動性断層(小町-大谷リニアメント)に分布する断層岩
- 18 今村朋裕・石山達也・戸田 茂・河村知徳・佐藤比呂志
浅層反射法地震探査と地形・地質データに基づく中央構造線活断層帯の浅部地下構造
- 19 河村知徳・堤 浩之・今村朋裕・石山達也・戸田 茂
地震波探査を用いた四国東部における中央構造線の地下構造解明

- 20 穴倉正展・澤井祐紀・鎌滝孝信・佐竹健治・岡村行信・那須浩郎・松本 弾.....
.....北海道東部・霧多布湿原の浜堤列からみた隆起イベントの発生年代と再来間隔
- 21 重野聖之・七山 太・添田雄二・古川竜太・石井正之.....
北海道東部，根室市別当賀低地において記載された4層の津波砂層と広域イベント対比
- 22 後藤秀昭・青山繁雄..... 常磐海岸北部の旧ラグーンからみいだされた津波堆積物
- 23 藤原 治・平川一臣・入月俊明・鎌滝孝信・内田淳一・阿部恒平・長谷川四郎・高田圭
太・原口 強.....
.....房総半島南西部館山平野から発見された関東地震津波堆積物とその堆積構造
- 24 松岡裕美・岡村 眞・島崎邦彦・千田 昇..... 別府湾の地震性タービダイト
- 25 岡村 眞・松岡裕美・長崎県雲仙活断層群調査委員会.....
.....海底コア試料に記録されたアカホヤ巨大津波の痕跡

日本地球惑星科学連合の発足へむけて

急激に変化する学術行政や地学教育に対し，地球惑星科学関連学会が連携して一元的な対応を実現するために，2004年6月から地球惑星科学関連学会連絡会において協議が進められてきました．2004年10月には日本地球惑星科学連合設立準備会が発足し，2005年5月の地球惑星科学関連学会合同大会での発足を目指して準備を進めました．2005年2月の準備会において，日本地球惑星科学連合規約（案）が参加学会すべての合意のもとに承認され，この規約に基づく加盟予定学会への人材と情報提供の要請が行われています．

2005年2月20日に開催された評議員会において，日本第四紀学会はこの規約と連合準備会の要請を受け容れて，日本地球惑星科学連合に参加することを承認しました．

規約の要点は，日本地球惑星科学連合（以下，連合）が加盟学会を代表して情報発信・交流や研究発表を行うとともに，国及び社会一般とのインターフェイスの役割を果たす点にあります．地球惑星科学分野ではこれまで小規模な学会が多数存在しました．しかし，現在の学術・教育行政に対して個別学会の発言が取り上げられるシステムは消滅しつつあります．地球惑星科学の研究と地学教育の推進のために統一的な組織が必要とされています．

運営面では，連合運営に必要な経費は合同大会等の収益を持って充てられるため，連合の財政が危機に瀕する場合以外，加盟学会に経費負担を求められることはありません．加盟学会は，連合運営のための人材若干名と連合で共有するための学術的な情報の提供を求められています．この人材とは，加盟学会の代表ではなく，連合において規約第25条(1)～(5)の委員会の委員として，地球惑星科学分野全体のため

に働く適任者を求められています．地球惑星科学全分野を見渡す学際的な巨大組織で腕を振るってみたい会員は日本第四紀学会幹事会渉外担当までご連絡ください．

連合の科学的なコンテンツと財政的な基盤は，毎年5月に開催される地球惑星科学関連学会合同大会にあります．日本第四紀学会は，『第四紀』セッションを始め，多数のセッションを支えています．本通信に掲載したプログラムをご参照のうえ，ふるってご参加ください．

幹事会渉外担当 奥村晃史（広島大学）

日本地球惑星科学連合規約（案）

第1章 総則

（名称）

第1条 本団体は，日本地球惑星科学連合（Japanese Union of Earth and Planetary Sciences）と称する。

第2章 目的及び事業

（目的）

第2条 本団体は，我が国の地球惑星科学コミュニティを代表し，国際連携及び社会への情報発信，関連分野の研究発表，情報交換を通じて，学術の発展に寄与することを目的とする。

（事業）

第3条 本団体は，前条の目的を達成するために次のことを行う。

（1）地球惑星科学コミュニティに対する国及び社会一般からの諸要請への対応

- (2)地球惑星科学コミュニティの意見集約、対外的情報発信及びアウトリーチ
- (3)地球惑星科学に関わる国際学協会との連携及び国際プロジェクトへの対応
- (4)地球惑星科学に関わる年次研究発表集会の開催及び国際会議等の企画・開催
- (5)地球惑星科学コミュニティに共通する諸問題についての検討と提言
- (6)その他、地球惑星科学の総合的発展を図るために必要な諸活動

第3章 加盟学会

(加盟学会の要件)

第4条 本団体に加盟する学協会は、以下の要件を満たさなければならない。

- (1)地球惑星科学に関連する学術団体であること。
- (2)本団体の設立趣旨に賛同する学術団体であること。

(加盟学会の義務)

第5条 本団体に加盟する学会は、以下の義務を負う。

- (1)本団体を運営する上で必要とされる人材の派遣及び情報の提供
- (2)本団体を存続させるために評議会が必要と認めた応分の経済的負担

(加盟)

第6条 本団体に加盟するためには、評議会の承認を得なければならない。

(脱退)

第7条 本団体を脱退するためには、評議会に申し入れなければならない。

第4章 組織と役員

(組織)

第8条 本団体を運営するために、評議会、運営会議、及び事務局を設ける。

(評議会)

第9条 評議会は、本団体の運営方針について審議し、事業内容について監査する。

第10条 評議会を構成する委員(評議員)は次の者とする。

- (1)各加盟学会の長
- (2)運営会議の議長及び副議長

第11条 評議会の議長は評議員の互選により選出する。

第12条 議長の任期は1年とし、再任を認めない。

第13条 議長は評議会を招集する。

第14条 評議会の議決に関する事項については別に定める。

(運営会議)

第15条 運営会議は、本団体の事業を推進し、

運営を統括する。

第16条 運営会議は、議長、副議長、及び議員によって構成される。

第17条 運営会議の議長は、本団体を代表し、運営全般を総理する。

第18条 副議長は議長を補佐する。

第19条 議員は、担当する各委員会の委員長として、運営の実務を行う。

第20条 議長、副議長の任期は2年とし、再任を認めない。

第21条 議員の任期は2年とし、再任を妨げない。

第22条 議長、副議長、議員の候補者の選出は運営会議で行い、評議会の承認を得る。

第23条 議長は運営会議を招集する。

第24条 運営会議の議決に関する事項については別に定める。

(各委員会)

第25条 運営会議の下に、運営の実務を行う次の常置委員会を置く。

- (1)総務委員会
- (2)財務委員会
- (3)企画委員会
- (4)広報・アウトリーチ委員会
- (5)大会運営委員会
- (6)教育問題検討委員会
- (7)国際委員会

第26条 各委員会の業務内容については別に定める。

第27条 各委員会は、委員長、副委員長、及び委員によって構成される。

第28条 各委員会の委員長は、運営会議が議員の中から選任する。

第29条 各委員会の委員長、副委員長及び委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

第30条 各委員会の副委員長及び委員は、加盟学会からの情報提供に基づき、運営会議が選任する。

(事務局)

第31条 本団体に事務局を置く。

第32条 事務局は、本団体の運営全般に関わる事務を行う。

第33条 事務局に事務局長を置く。

第34条 事務局長は運営会議が選任する。

第5章 会計

(経理)

第35条 本団体の運営経費は、第2章第3条に掲げる事業によって生じる収入をもってあてる。

第36条 本団体の収支決算は、運営会議議長が作成し、評議会に報告して承認を得なければならない。

第 6 章 規約の変更

第 37 条 本規約の変更は、運営会議が提案し、評議会の承認を得て発効する。

附則

1 この規約は、平成 17 年 5 月 25 日から施行する。

2 第 22 条及び第 30 条の規定に関わらず、本団体発足時の運営会議議長、副議長、各委員会委員長、副委員長及び委員については、日本地球惑星科学連合設立準備会において選定し、発足時に開催される評議会において承認を得るものとする。

3 発足時の加盟学会は次の通りとする(50 音順、但し日本を除く)。

日本応用地質学会	日本海洋学会
日本火山学会	日本岩石鉱物鉱床学会
日本気象学会	日本鉱物学会
日本古生物学会	資源地質学会
日本地震学会	日本水文科学学会
水文・水資源学会	日本雪氷学会
日本測地学会	日本第四紀学会
日本地下水学会	日本地球化学学会
地球電磁気・地球惑星圏学会	日本地質学会
日本地理学会	日本粘土学会
日本陸水学会	日本惑星科学学会

50 周年第四紀電子出版編集委員会から 50 周年企画に関するお知らせ

50 周年記念事業実行委員会における検討により、50 周年第四紀電子出版編集委員会(当初は、50 周年第四紀電子出版委員会)を発足し、同委員会において CD-ROM をベースとした出版物企画に関する議論とその作成が進められることとなった。委員会は、遠藤邦彦(委員長)、奥村晃史、鈴木毅彦、吾妻 崇、原口 強、正田浩司、内記昭彦、小野 昭、中村俊夫、堀 和明、三浦英樹、百原 新の委員から構成される。

出版形式：CD などのメディアを用いた電子出版とし、当委員会で独自に編集・発行する。内容および編集方針：INQUA 招致用に作成した CD を活用し、きれいな画像を教育向けに提供し、第四紀学会の成果を一般に広く普及するものであることと同時に、「日本の第四紀研究」(1977)の最新版であることをイメージしている。すなわち授業の教材として役立つ高校・中学の教員向けの普及版と、専門家向けのものを合わせ作成する。購買層は会員全員と一般を想定。

進行状況および今後の予定：これまでに章立てと執筆者(分野毎に小項目を設け、それぞれに執筆者を定める)の検討を行った。当面は INQUA 招致 CD をベースに FileMaker を使用して電子的データベースを集積する。INQUA の CD は各分野を網羅するものではなかったが、今回作成のものは各分野を網羅する。執筆の具体的項目として、1) 日本世界を問わない普遍的な情報(歴史、原理、応用)、2) 世界の研究状況、3) 日本の研究状況、4) 最近の進展があげられる。作成までの目安として、2006 年夏に 50 周年記念セミナーや国際シンポジウムがあるのでそれに間に合うように作成する。分野毎責任者から各執筆者への依頼は 3 月上旬頃に行う(締切は 7 月末を予定)。

分野毎責任者は以下のとおり。年代測定：中村俊夫、層序・編年：鈴木毅彦、テクトニクス：奥村晃史、地形・地質：堀 和明、極地・寒冷地：三浦英樹、環境変動：遠藤邦彦・百原新、過去の人間：小野 昭、現代の人間：原口 強、近未来予測：吾妻 崇

日本第四紀学会 2005 年大会案内 (第 1 報) 発表申し込み

1. 日時・開催場所: 2005 年 8 月 26 日 (金) ~ 29 日 (月), 島根大学
2. 発表の申し込み締め切り: 2005 年 6 月 10 日 (金)
3. シンポジウム「汽水域における完新世の古環境変動 - 自然環境の変遷と人為改変による環境変化 -」(依頼講演のみになります)
4. 巡検の概要 (8 月 29 日実施・早朝現地集合 1 コースのみ, 申し込みは次号で案内)
5. 普及講演会 2005 年 8 月 28 日 (日) 午後「人は自然環境とどのように向き合うのか - 過去から現在, 未来まで - (仮題)」(同会場で実施)
6. 宿泊: 本号にホテル一覧の案内を付します。大会当日には高校生の中国吹奏楽大会が行われます。松江市内のビジネスホテルはたいへん混み合うことが予想されますので, できるだけ早い時期の予約をお願いいたします。

1. 日時・開催場所の概要

研究発表, 総会, 評議委員会, 懇親会, シンポジウム, 普及講演会, 巡検

日程: 2005 年 8 月 26 日 (金) ~ 8 月 29 日 (月)

実行委員会委員長: 木村純一

連絡先: 木村純一

〒690-8504 松江市西川津町 1060

島根大学 総合理工学部地球資源環境学科

E-mail: jkimura@riko.shimane-u.ac.jp

Tel: 0852-32-6462 Fax: 0852-32-6469

開催場所:

一般研究発表 (口頭・ポスター), シンポジウム, 総会, 懇親会, 普及講演会: 島根大学 (場所等の詳細は次報でお知らせします)

26 日 (金) 一般講演, ポスターセッション, 評議委員会 (夕方)

27 日 (土) 一般講演, 総会 (昼前), ポスターセッション, 懇親会

28 日 (日) シンポジウム (午前)「汽水域における完新世の古環境変動 - 自然環境の変遷と人為改変による環境変化 -」

28 日 (日) 普及講演会 (午後)「人は自然環境とどのように向き合うのか - 過去から現在, 未来まで - (仮題)」(同会場)

29 日 (月) 巡検「三瓶火山と埋没林」を予定しています (案内者: 中村唯史ほか)

2. 発表の申し込み

2-1. 一般研究発表の申し込み

今大会では, 一般研究発表をオーラル・セッ

ションとポスター・セッションの 2 つに区分します。ポスターの掲示は終日可能です。一般研究発表での講演を希望される方は 11 ページにある「発表申込用紙」(コピーでもよい)に所定の事項を記入の上, 「2-3 講演要旨の原稿用紙の書き方」にしたがった写真製版可能な原稿及びそのコピー 1 部を 6 月 10 日 (金) までに (必着厳守) 行事幹事までお送り下さい。原稿の行事幹事への到着をもって原稿の受付といたします。一般研究発表では 1 人一件のみの発表が可能です。オーラル・セッションの発表時間は 1 人およそ 12 分 (質問時間を除く) 程度を予定しています (発表件数によって変更の可能性有り)。スクリーンは 1 枚です。十分な説明や討論を希望する方には, ポスター・セッションへの申し込みをおすすめいたします。昨年同様にポスター発表の口頭ショートサマリー発表を行う予定です (各 2-3 分)。オーラル・セッション, ポスター・セッションともに講演要旨集に 2 ページ執筆して下さい。申込用紙の書式には, 連絡先としてファックス番号と電子メールアドレスを, 是非ご記入下さい。メールアドレスは, 読み易いようにご記入下さい (印字したものを歓迎します)。申込用紙の記載内容は, メールでも受け付けています。行事幹事まで同内容をお送り下さい。

要旨集原稿の送付先:

〒305-8567

茨城県つくば市東 1-1-1 中央第 7

産業技術総合研究所 地質情報研究部門

日本第四紀学会行事幹事 斎藤文紀あて

(TEL: 0298-861-3895, 3772

FAX: 029-861-3747

e-mail: yoshiki.saito@aist.go.jp)

(送付は郵便でお願いします。メール添付は受け付けていません。また送付先は実行委員会ではありません。お間違えのないようにご注意ください)

2-2. シンポジウムの原稿提出

シンポジウムで発表される方は, 「2-3. 講演要旨の原稿の書き方」にしたがった写真製版可能な原稿及びそのコピーに, 「発表申込用紙」(コピーでもよい)を添えて, 6 月 10 日 (金) までに上記の行事幹事までお送り下さい。原稿枚数は 2 ページまたは 4 ページでお願いします。今回は依頼講演者のみが対象となります。

2-3. 講演要旨の原稿の書き方

原稿用紙は, 発表者各自が用意した A4 版白

紙を、横書き・縦置きで使用してください。左右各 2.5cm、上端 3.0cm、下端 3.5cm は空白にしてください。表題・著者名は、(例)のように和文表題・著者名(所属)、英文著者名・表題の順に書いてください。和文表題は、1 行目の左側を 1.5cm あけて(左端から 4.0cm)左詰めで書いてください。2 行以上にわたる場合でも 1.5cm あけて左詰めで続けてください。和文著者名は、和文表題の後改行して、発表者を右端に右詰めで書いてください。2 行以上にわたる場合でも 1.5cm あけて右詰めにしてください。所属は和文著者名の後にカッコを入れて簡潔に書いてください。英文著者名・表題は、和文著者名の後改行して、左詰め著者名・表題の順に「;」でつないで書いてください(所属は不要)。本文は英文表題の次の 1 行をあけて書き始めてください。行数・字数は自由ですが、36 行・35 字程度を目安としてください。不明な場合は昨年の要旨集を参考にしてください。本年も同一仕様です。ワープロ使用の場合は濃く印字してください。手書きの場合は黒色インクまたは黒色ボールペンを使用し、濃く細く書いてください。手書き図表の場合は黒インクを使用し原稿用紙に直接書くか、あるいは青色方眼紙・白紙・トレーシングペーパーなどに清書して枠内に貼ってください。図が原稿の上下端、左右端の空白部分にかからないようにご注意ください。印刷時に A4 の原稿が B5 版に縮小されますので、図の縮尺については「何分の 1」という表現はしないで必ずスケールを入れてください。

3. シンポジウム

「汽水域における完新世の古環境変動 - 自然環境の変遷と人為改変による環境変化 -」

今回はシンポジウムに関連する口頭及びポスター発表の募集を行いません。シンポジウムの詳細は次号を御覧下さい。

4. 巡検

「三瓶火山と埋没林」を予定しています(案内者:中村唯史ほか)。

参加者は 30 日朝大田市駅 9:00 集合 - 小豆原埋没林 - 西の原 - 三瓶自然館(見学と昼食) - 横見埋没林 - 出雲市駅 17:00 解散。詳細及び募集は、次号の第四紀通信に掲載します。

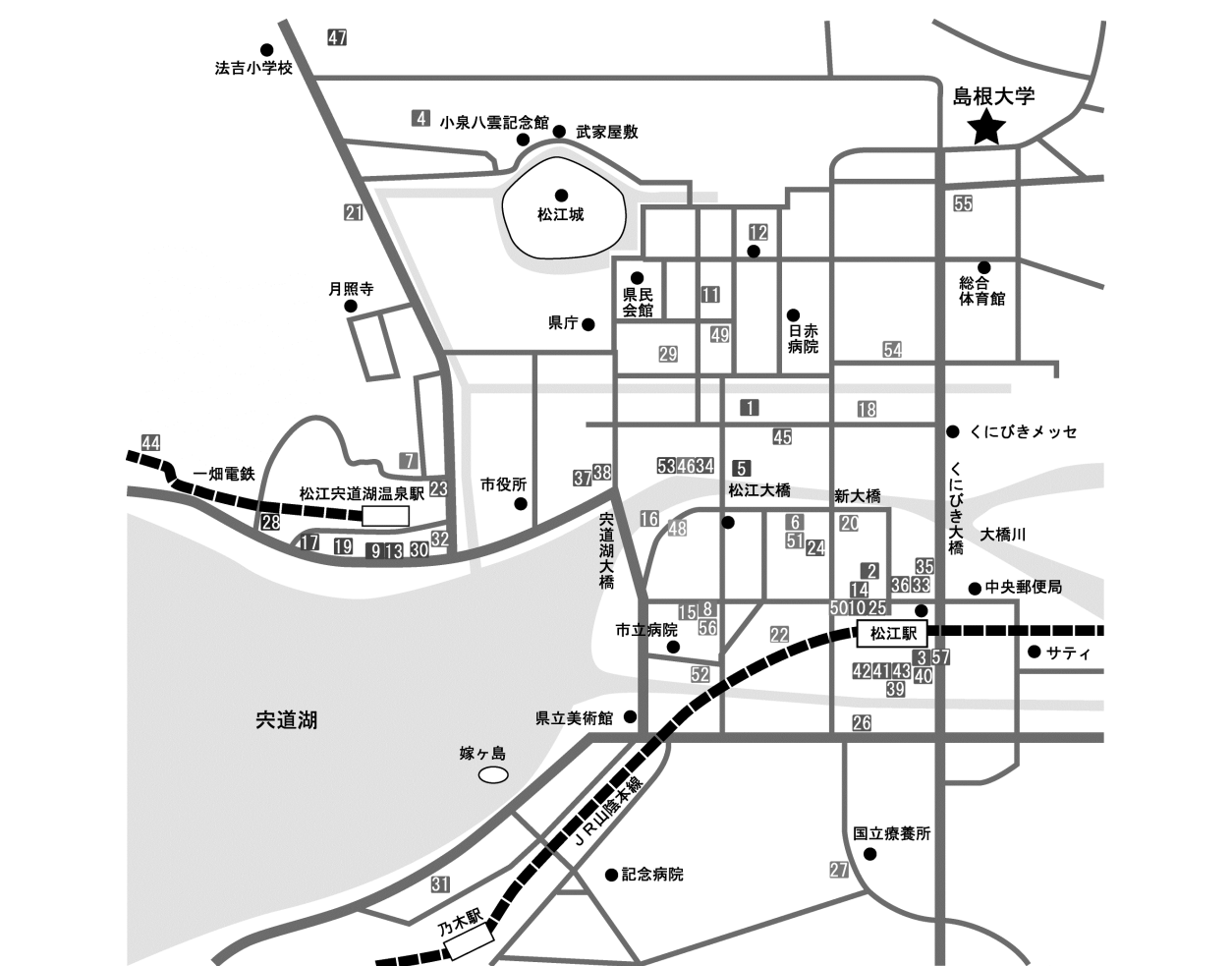
5. 普及講演会「人は自然環境とどのように向き合うのか - 過去から現在, 未来まで - (仮題)」島根大学会場で実施。詳細は次号を御覧下さい。

6. 宿泊

宿泊の案内と申し込みは、次ページにホテル一覧の案内をします。大会当日には高校生の中国地方吹奏楽大会が行われます。松江市内のビジネスホテルはたいへん混み合うことが予想されますので、できるだけ早い時期の予約をお願いいたします。なお、以下のウェブサイトからも同様の情報と各々の宿が参照できます。
<http://www.city.matsue.shimane.jp/kankou/jp/yado/yado3.htm>

学会メーリングリストへの登録について

昨年 8 月から日本第四紀学会メーリングリスト jaqr を立ち上げ、緊急連絡や講演・公募情報などの広報活動を行っております。2005 年 3 月現在、977 人の会員の方が登録されておりますが、まだかなりの未登録会員がおります。登録を希望される方は、第四紀通信 11 巻 6 号 (<http://www.soc.nii.ac.jp/qr/QRNL1106.pdf>) の 6 頁にある<自動登録・削除>の説明にしたがって登録されるか、広報幹事・兵頭政幸 <mhyodo@kobe-u.ac.jp> までご連絡ください。



宿泊施設マップ：スケール南北約 6km．大学への交通は駅前からバス利用が便利です．

No	ホテル/旅館	名称	0852-	No	ホテル/旅館	名称	0852-
1	ホ	アークホテル	26-7880	30	旅	ホテル一畑	22-0188
2	ホ	アルファーワン松江	31-2200	31	公	ホテル宍道湖	25-1155
3	ホ	アルファーワン第2松江	26-7800	32	公	ホテル白鳥	21-6195
4	公	ウェルハートピア松江	25-3224	33	ホ	松江アーバンホテル	22-0002
5	旅	大橋館	21-5168	34	ホ	松江シティホテル	25-4100
6	旅	大巾屋	21-2964	35	ホ	松江第2アーバンホテル	22-0002
7	旅	岡本旅館	24-6499	36	ホ	松江東急イン	27-0109
8	旅	景山旅館	21-4849	37	ホ	松江ニューアーバンホテル本館	23-0003
9	旅	グランドホテル水天閣	21-4910	38	ホ	松江ニューアーバンホテル別館	23-0003
10	ホ	ホテル1-2-3松江	27-3000	39	ホ	松江プラザホテル本館	26-6650
11	公	サンラボーむらくも	21-2670	40	ホ	松江プラザホテル別館	26-6650
12	公	島根県教育会館	25-6200	41	ホ	松江南口ホテル	27-2000
13	旅	松平閣	23-8000	42	ホ	松江ユニバーサルホテル本館	25-0001
14	ホ	東横イン松江駅前	60-1045	43	ホ	松江ユニバーサルホテル別館	25-8100
15	旅	竹原旅館	24-6576	44	ユ	松江レークサイドユースホステル	36-8620
16	旅	鶴屋旅館	21-3378	45	ホ	ホテル ルートイン松江	20-6211
17	旅	てんでん手毬	21-2655	46	旅	皆美館	21-5131
18	旅	なかしま旅館	25-1067	47	民	民宿にしむら	26-3928
19	旅	なにわー水	21-4132	48	他	ヤングイン松江	25-4500
20	旅	野津旅館	21-1525	49	旅	旅館あおやま	23-1556
21	公	パレスティまがたま	22-2054	50	旅	旅館おおさこ	22-0035
22	旅	ビジネス石田	21-5931	51	旅	旅館田中屋	21-3511
23	ホ	ビジネスホテル北松江	26-2910	52	旅	旅館寺津屋	21-3480
24	ホ	ビジネスホテル大栄	24-1515	53	旅	臨水亭	21-4839
25	ホ	ビジネスホテル山本	21-6121	54	旅	ルーミかわせ	24-8715
26	ホ	ビジネスホテルレークイン	21-2424	55	公	レインボープラザ	27-6900
27	旅	ビジネス旅館やくも	21-1688	56	旅	渡部旅館	21-3413
28	ペ	ペンションとび田	36-6933	57	ホ	松江駅前ユニバーサルホテル	28-3000
29	旅	薄葉荘	21-4337				

「講演要旨の書き方の例」と「発表申し込み書」の書式

A4版用紙 縦長

余白 30mm

空白

第四紀に関する研究の成果－現状と課題
四紀花子（地球大学）
Hanako YONKI: The Quaternary Research: the state of the Art
[1行空白]
第四紀研究は近年めざましい進歩を遂げてきたが、その最新の成果と残された課題について報告を行う．ところ

25mm 25mm

印刷時にはB5版に縮小します．図の縮尺はスケールで表示し「00分の1」という表現を用いないで下さい．図が余白にかからないよう注意してください．

0 100m

35mm

幅210mm 高さ294mm

発表申し込み書

氏名・所属				
講演題目				
キーワード (3～5個) 講演要旨には掲載しません				
代表者の連絡先	〒 e-mail : Tel : Fax :			
発表種別 (○を付ける)	一般研究発表			シンポジウム
	口頭発表	ポスター	どちらでもよい	
スライド・OHP の使用(○を付ける)	スライド (8枚以内)	スライド+OHP (8枚以内)	OHP (8枚以内)	液晶プロ ジェクター

第4回活断層研究センター研究発表会のお知らせ

産業技術総合研究所活断層研究センター

産業技術総合研究所活断層研究センターでは、以下のように第4回の研究発表会を開催します。この研究発表会では、活断層研究センターの第1期4年間の研究成果を紹介させていただくとともに、活断層研究の現状と今後の課題について議論を深めたいと存じますので、多数の皆様のご来場をお待ちしております。

なお、事前の参加登録・予約等は不要です。お早めに会場にお越し下さい。

日時：平成17年4月12日（火） 10：30～17：00（10：00開場予定）

場所：コクヨホール（東京都港区；JR品川駅前）

プログラム（予定）

- | | | |
|--------|------|----------------------------|
| 10：30～ | 杉山雄一 | 活断層研究センター 4年間の歩みと新たな挑戦 |
| 11：00～ | 吉岡敏和 | 全国主要活断層の活動確率評価 |
| 11：30～ | 栗田泰夫 | 活断層のセグメント区分手法とその有効性 |
| 12：00～ | 遠田晋次 | 断層間相互作用と「連動」 |
| | | |
| 14：30～ | 佐竹健治 | 2004年スマトラ沖地震とインド洋の津波 |
| 15：00～ | 岡村行信 | 海溝型地震の多様性と今後の課題 |
| 15：30～ | 国松 直 | 第二期に向けた取り組み - 地震動予測と地表変形予測 |
| 16：00～ | 関口春子 | 地震動予測手法の研究と阪神地域への適用 |
| | | |
| 16：30～ | 総合討論 | |

なお、昼食休憩時を利用して、研究成果のポスター展示と活断層データベースのデモンストラクションを行う予定です。

詳細につきましては、活断層研究センターホームページ（<http://unit.aist.go.jp/actfault/activef.html>）をご覧ください。

お問い合わせ：活断層研究センター 吉岡敏和

E-mail：yoshioka-t@aist.go.jp 電話：029-861-2465/ Fax：029-861-380

日本第四紀学会講習会

「第四紀脊椎動物化石の基礎知識と研究法」

日本各地の第四紀層からは、しばしば脊椎動物の化石が発見されます。ナウマンゾウやヤベオオツノジカなど一般にもよく知られた動物も、そのような化石をもとに復元されたものです。今年2月に本学会と千葉県立中央博物館の共催で行った「ナウマンゾウがいた頃」というシンポジウムも、そのような化石を中心に扱ったものでした。脊椎動物化石は一般の関心も高いので、今回はそのような化石を取り上げて、その基礎知識と研究法を学ぶ講習会を企画しました。本講習会では、大阪市立自然史博物館の施設を利用させていただき、実物標本やレプリカを観察して脊椎動物化石についての理解を深めます。

日時：2005年5月29日（日） 10：00 から 16：00

会場：大阪市立自然史博物館実習室（下図参照）。会場には職員通用口を通して入りますが、守衛の人に日本第四紀学会講習会の参加者である旨を伝えてから入館して下さい。受講者定員：24名（先着順） 第四紀学会の会員を対象としますが、申し込みが少ない場合は非会員の参加を認めることがあります。

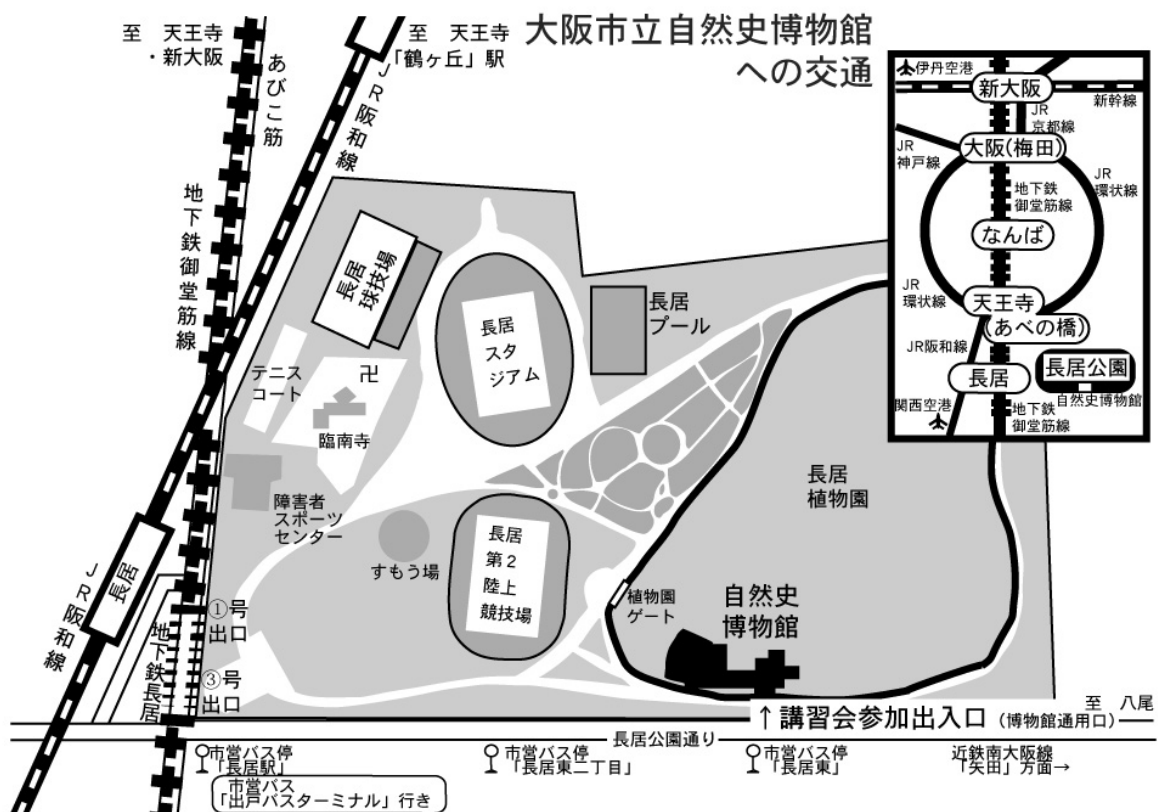
申し込み：下記の企画担当幹事に、eメールまたは葉書で4月28日（金）までに申し込んで下さい（28日必着）。メールや葉書には講習会に参加したい旨と、氏名、住所、電話番号、eメールアドレスを書いてください。

参加費：1000円（入館料300円を含む：当日会場で集めます）。

連絡先：〒448-8542 刈谷市井ヶ谷町広沢1 愛知教育大学自然科学系理科教育講座 河村善也（日本第四紀学会企画担当幹事）

電話：0566-26-2374，FAX：0566-26-2310

eメール：yskawamr@aecc.aichi-edu.ac.jp



国際デルタ会議 (IGCP-475 第 2 回年会) ホーチミン市で開催 報告と第 3 回会合のお知らせ (2006 年 1 月にブルネイ)

産業技術総合研究所地質情報研究部門 斎藤文紀

「国際デルタ会議：地質モデリングと管理」が 2005 年 1 月 10 日～16 日にベトナムホーチミン市で開催されました。同会議は、IGCP-475「モンスーンアジア太平洋地域のデルタ」(2003-2007)と APN「アジアの大規模デルタ」の第 2 回年会、CCOP DelSEA プロジェクト「東南アジアと東アジアのデルタにおける統合的地質アセスメント」(2004-2008)の第 1 回会合の合同会議で、ベトナム科学技術院(VAST) 産業技術総合研究所地質情報研究部門、新潟大学の共催で行われました。

参加者は、同伴者を含めて、日本 16 名、中国 11 名(内香港 1 名)、インド 6 名、韓国 5 名、米国 5 名、オーストラリア 4 名、タイ 3 名、フィンランド 3 名、カンボジア 2 名、ブルネイ 2 名、バングラデシュ 2 名、英国 2 名、ドイツ 2 名、イラン 1 名、パキスタン 1 名、スリランカ 1 名、マレーシア 1 名、インドネシア 1 名、フィリピン 1 名、カナダ 1 名、ポーランド 1 名、オランダ 1 名で合計 72 名、ベトナムから 31 名で、合わせて 103 名が参加しました。会議では、メコンデルタを中心に、河川流域から沿岸・陸棚域すべてを対象に、デルタの変遷から現在の変容まで、また自然現象から人間活動の影響、またそれらへの適応策や対応策まで、世界のデルタを取り巻く様々な研究が報告されました。また、12 月に起こったインド洋大津波の特別セッションが急遽設けられ、産業技術総合研究所の七山 太氏による日本での研究の紹介に引き続いて、参加者全員による黙とう、インド、スリランカ、タイの参加者から津波の報告が行われ、地質災害に対してどのような取り組みが行われるべきか討議されました。前後に行われた巡検は、プレ巡検が信州大学の北沢俊幸さん他の案内でホーチミン市北部に分布する離水した浅海成更新統のデルタ/エスチュアリー堆積物で、参加者が 51 名、ポスト巡検は、本会議の現地ホストでもある VAST の地理副研究所のグエン バン ラップさん他の案内でメコンデルタの地形と堆積物を対象に行われ、参加者は 69 名でした。次回以降の会合は、2006 年 1 月にブルネイ、2007 年 1 月にバングラデシュのダッカ、2008 年 1 月に中国の上海/青島で開催されることに決まりました。

次回の会合は、2006 年 1 月 13～18 日にブルネイのブルネイ大学で開催されます。ホストは、Joe Lambiase さんです。会議名は「国際デルタ会議：堆積システムと層序的発達」で、堆積地質に焦点を当てた会議にする予定です。参加費用は、今回の会議同様に、登録料、巡検費用、滞在費の全部込みで、500 ドル程度です。また会議の後、オプションツアーで、インドネシアのマハカムデルタへの巡検も 1 月 19 日～22 日に企画されています。これらの詳細な案内は、8 月に発行されるサーキュラーに記載されます。参加と発表の申し込みは、10 月 15 日締め切りの予定です。オプションツアーは、人数制限があり、IGCP-475 の登録者優先の先着順になります。皆様の参加をお待ちしています。

2005 北淡国際活断層シンポジウムの参加報告

吾妻 崇・栗田泰夫（(独)産業技術総合研究所活断層研究センター）

兵庫県南部地震発生から10年を迎えた今年1月に、震源地に近い淡路島の北淡町で北淡国際活断層シンポジウムが開催され、研究発表会と巡検が行われた。研究発表会は2005年1月17日から22日に、野島断層保存館に隣接するセミナーハウスを会場として開催され、巡検は1月22日から24日にかけて四国方面で実施された。今回のシンポジウムの主催は、北淡国際活断層シンポジウム組織委員会・実行委員会、北淡町および同町教育委員会であり、共催として、(独)産業技術総合研究所活断層研究センター、国際リソスフェア研究計画(ILP)タスクグループII-5およびINQUAが、後援として兵庫県教育委員会と日本学術会議地質科学総合研究連絡委員会第四紀学専門委員会が参加した。この国際シンポジウムは、震災後5周年にあたる2000年1月にも開催されている。今回は、そのときと比べてやや規模が小さかったが、世界17か国から約160名の活断層・古地震研究者らが参加登録した。

研究発表は、オーラルセッション(42件)とポスターセッション(75件)に分かれて行われた。シンポジウムのサブタイトルとして「地震災害軽減のための活断層研究 - その最先端 - 」と謳われていたように、活断層から発生する地震の予測に関する最先端の研究が議論された。5日間にわたるシンポジウムの前半は、確率論的ハザードマップの構築にかかる活断層研究とその基礎資料となるデータベース作成に関する話題を中心に進められた。米国と日本では古地震学的なデータが集積し、地震発生間隔と最新イベントからの経過時間に基づく確率論的な活断層評価が実現しつつあり、その評価手法の高精度化に向けて様々な議論が行われた。シンポジウム後半では「古地震研究のフロンティア」と題して、世界各地からの研究事例が紹介された。5年前のシンポジウムでは、活断層の分布および地形学的特徴の表現にDEM画像が普及していたのが印象的であったが、今回はGPSによる断層周辺の地殻変動に関するデータが多くの研究で示され、地形・地質学的なデータとの比較が試みられており、近年の研究の進展性が感じられた。ポスター発表には、若手研究者による発表が多く含まれており、休憩時間などを利用して各ポスターの前で活発な議論が繰り広げられていた。それぞれのポスターを2日ないし3日にわたって展示できるよう配慮されていた点が喜ばしかった。このほか、20日の夕方には、世界の研究者と地元住民との対話集会ももたれた。宿泊先となったホテルでは、夜間集会として、国際リソスフェア研究計画タスクグループII-5およびINQUA古地震研究委員会のビジネスミーティングが行われた。また、地元の方達からは暖かいレセプションのもてなしをして頂いた。ここに滞在した1週間は、普段は論文で名前を見るしかない研究者たちとの交流を深めるのにとても有意義であった。

巡検には、海外からの研究者を中心に約40名が参加し、広島大学の前杵英明氏が室戸岬の完新世における地震性地殻変動について、また福島大学の後藤秀昭氏が中央構造線活断層系西部の歴史時代における断層変位を案内した。前者ではあいにくの雨模様の中、時間予想可能モデルの舞台となった隆起旧汀線跡を熱心に見学した。また後者では中世の断層活動による水田境界や畦のオフセットが現在も保存されていることに、驚きの声が寄せられた。

前回の2000年シンポジウムの前後には、明瞭な地震断層の伴う大地震がトルコ、台湾、中国、アラスカで発生している。これらの地震断層の調査から得られたデータは、大規模な活断層系から発生する地震の研究を大きく促進させてきた。動的断層破壊モデルやGPSデータを用いた研究と古地震学的な手法との比較検討が進むことにより、断層における地震発生モデルがより現実に近いものへととなりつつあることを感じ取ることができた。しかしその一方で、2000年鳥取県西部地震、2004年新潟県中越地震、イランで発生した2002年Changureh地震や2003年Bam地震などのように明瞭な地表変位を伴わない中規模地震では、古地震学的なアプローチの困難さが浮き彫りとなった。活断層から地震を探る我々の研究には、まだまだ課題が多い。

INQUA 古地震研究専門委員会ビジネスミーティング報告

吾妻 崇(独)産業技術総合研究所活断層研究センター)

2005年1月に開催された北淡国際活断層シンポジウムの際に, INQUAの Terrestrial 委員会古地震研究専門委員会のビジネスミーティングが行われた。日時は1月19日午後9時から10時半にかけてであった。上記委員会の委員長であるイタリアの Alessandro Michetti を始め, アメリカ, イタリア, ギリシア, 台湾, フィリピン, 日本などから23名が参加した。日本からの参加者は, 吾妻 崇, 奥村晃史, 太田陽子, 衣笠善博, 丸山 正であった。議題は, 地震の震度評価として提案された INQUA Scale の趣旨の説明とその適用に関する問題点の討議である。

会合は, 日本第四紀学会ネオテクトニクス研究委員会の代表者である吾妻の司会により進められ, まず INQUA Scale の提案理由について Michetti から説明があった。現在震度の表現が国毎にやや異なる基準を使用しているのに対し, 世界共通な基準を作り, 国際的な比較の便, 古地震の規模の復元のために, 地震時に起こった自然現象(地表地震断層, 地滑り, 液状化など)の地質学的効果を客観的な指標とするのが妥当であるという提案と, イタリアなどにおけるその適用例が紹介された。ついで, 太田が1995年兵庫県南部地震, 1999年集集地震, 2004年中越地震について, 委員会から提案されている自然事象を記録する用紙への記入例を紹介し, 予察的に行った作業を通じて感じた問題点(記録表の内容の重複を避け, 記入しやすくすべき等)が指摘された。ついで, INQUA Scale に関してイタリア以外の国からの反応, 適用上の問題点, どの程度の精度を目標としているかなど, さまざまな問題が議論された。結局, フォーマットについては今後より簡便なものに修正し, かつ web site に公表し, 適用例を多く集め, 従来の震度による表現と比較しつつ議論を重ねることになった。

INQUA 古地震専門委員会への対応は, ネオテクトニクス研究委員会の行動目標の一つである。さしあたり, 中越地震を事例として INQUA Scale による震度分布を求め, それを気象庁による計測震度分布と比較することを検討したい。この計画に賛同される方は, 4月末までに吾妻にご連絡いただきたい。具体的な方策は今後, e-mail 等で意見を交換し, 必要に応じて集会または現地討議を実施したい。なお INQUA Scale に関する情報は, この計画のホームページ (http://www.apat.gov.it/site/en-GB/Projects/INQUA_Scale/) を参照するか, 吾妻 (t-azuma@aist.go.jp) にお問い合わせ下さい。

日本第四紀学会・千葉県立中央博物館共催シンポジウム 「ナウマンゾウのいた頃」の報告

2005年2月20日(日)に千葉県立中央博物館を会場として, 標記シンポジウムが開催された。このシンポジウムは千葉県袖ヶ浦市吉野田の下総層群清川層から発掘されたナウマンゾウ化石やそれに伴う多くの化石, さらにそれらを含む地層の研究成果をまとめて公表するために企画された。多くの脊椎動物化石が産出し, それらが詳しく研究されていること, 化石を含む地層が堆積した当時の古環境が詳しく復元されていることなど, 第四紀研究の好例を示す大変充実した内容のシンポジウムとなった。

シンポジウムは千葉県立中央博物館の講堂で午前10時に始まり, まずは本学会の熊井久雄会長の挨拶と同博物館の三森俊彦副館長の挨拶があった。その後は同博物館の岡崎浩子氏の司会で各研究者の講演が行われた。午前の講演は次の5題であった。



シンポジウム会場風景（撮影：吉村光敏）

1. 兼子尚知：脊椎動物化石層の発掘 - 袖ヶ浦市吉野田にて -
2. 中里裕臣・佐藤弘幸：下総層群清川層の年代と構造運動
3. 岡崎浩子：河川の氾濫原の古環境と化石群
4. 池田 宏：海水準変動による地形変化（特別講演）
5. 平山 廉：下総層群清川層から発見された化石カメ類について

これらのうちの5は講演者が海外渡航中で不在のため、事前に収録されたビデオの音声とパワーポイントの画像を用いて行われた。午前の講演終了後、昼休みの時間を利用して講堂に隣接する研修室で日本第四紀学会の幹事会が行われた。午後岡崎浩子氏の司会で、次の4題の講演が行われた。

6. 百原 新・奥田昌明・斎木健一：下総層群清川層から産出する植物化石
7. 伊左治鎮司・鵜飼宏明：貝化石からさぐる淡水の環境
8. 高くわ祐司：下総層群清川層から産出したニホンジカについて
9. 樽 創：袖ヶ浦市吉野田産のナウマンゾウ

講演は午後2時40分に終了し、約20分間総合討論が行われた。時間が十分にはなかったため、討論はカメ化石から推定される古環境と植物化石から推定される古環境が必ずしも一致しないことについての討論が行われたただけであった。シンポジウムの講演が内容豊富であったので、総合討論が十分に行えなかったのはやや残念であった。シンポジウムは午後3時に終了し、そのあと同じ講堂内で日本第四紀学会の評議員会が行われた。

本シンポジウムには113名もの参加者があったが、参加者は皆熱心に講演に聴き入り、質疑や討論も活発に行われた。このシンポジウムのテーマとなった袖ヶ浦市吉野田産の化石は企画展「おもしろ研究紹介」として同博物館内に展示されていて、多くの参加者がこれらの化石を見学した。

本シンポジウムの企画や準備は岡崎浩子氏をはじめとする同博物館の方々や吉野田の化石の共同研究チームによって、主に行われた。シンポジウムがスムーズに進行し、盛会のうちに終了したのは、これらの方々の尽力によるところが大きい。改めて感謝したい。

（企画担当幹事 河村善也）

柴崎達雄氏の死を悼む

本会会員の柴崎達雄氏（元評議員・幹事）は肝機能不全のためながら闘病生活を余儀なくされていましたが、去る平成17年1月4日未明にご逝去されました。ここに謹んで会員の皆様にご報告し、哀悼の意を申し上げます。享年71歳でした。

柴崎達雄氏は筑波大学の前身である東京教育大学理学部地質学鉱物学教室を1955年に卒業。農林省の技官になりました。その後独立して応用地質コンサルタントを経営。さらに東海大学教授、日本学術会議会員を歴任され、国際協力事業団（現国際協力機構、JICA）専門家としてインドネシアの第四紀地質研究所（バンドン）に勤務。その後、新潟大学教授を以て定年を迎えられました。



著書には「地盤沈下」、「第四紀」（共著）、「地下水資源学」（編著）、「地下水盆の管理」（編著）、「略奪された水資源」などの著書や多数の応用地質、水資源関係の論文がある。

こうしたご専門の「水収支の研究・地下水学などへの貢献」があったとし、1983年には地質学会賞を受賞しておられます。このほか「沖縄の自然」、「日本の自然」、「Japan and its Nature」、「おいしい水は宝もの」ほかの普及書を多くの専門家の協力を結集して世に出された。病床中全力を振り絞って出版された「農を守って水を守る - 新しい地下水の社会学 - （2004）」は最後の著書となった。「水を以て地域に貢献」という、実地踏査と研究を通じて社会へ貢献するという信念を最後まで貫徹されました。

故人からはおつき合いを通じて多くのことにご教示をいただいたが、もっとも印象的な思い出はなんといっても筆者がJICA（前出）の専門家として1987年以来インドネシア共和国のバンドンに赴任し、滞在を共にしていた頃のことです。当時は日本（JICA）の協力でバンドンに新設された「第四紀研究所」を拠点とし、「ジャワ原人化石包含層に関連した第四紀の共同研究」が推進されていた頃でした。その研究活動や同研究所設立等の経緯については本会誌「第四紀研究」に詳しく報告されている（渡邊、1990；柴崎・真野、1993いずれも「第四紀研究」に掲載）。ちょうど日本側の研究代表者が故渡邊直経氏（元本学会会長）から故柴崎達雄氏にバトンタッチされる頃であった。それまで約15年に及ぶ故渡邊直経氏を中心にした研究と技術移転協力事業が一段落し、それまで事業推進に協力してきた故柴崎達雄氏が次を担うことになっていた。研究の視点も「ジャワ原人産出地中心の地質調査」からより広域の「環境地質のための調査と総合的研究」へと切り替わるときでもあった。当研究所は政府関連の研究所の中でももっとも活気にあふれた研究所の1つとなっていて、日本からはもちろんオランダその他の欧州からの研究者の訪問や現地調査への同行等が頻繁にあるなど、国際色豊かな研究所であった。そのような中で、日本から多くの若手研究者が参集し、初めて外国研究者と会い交えての調査研究の機会に接することが出来た。寝食を共にしながら野外での共同調査は英語による会話の訓練にもなり、コミュニケーションのづくりの場に挑む機会が出来て、海外で活躍するうえでの貴重な経験を積むことができる場があった。海外での調査研究や研究協力で直面するいろいろな場面への対応の仕方をこの期間のおつき合いを通じて身をもって学ぶことができ、このチームに参画できたことを大変幸運に思っています。

すでに15年も経た今も故人のお元気だった当時のことはまだ生々と思い出されますが、近年は病魔との戦いの連続でありましたが今はやっと病魔から解放され、きっと天上でも地下水のことを思いやり走り回っていることでしょう。ご冥福をお祈りします。

なお、ご遺族の柴崎君枝様は以下の住まいにお元気で過ごしていただいております。

ご住所：〒350-02 埼玉県鶴ヶ島市藤金 182-1

真野勝友（本会副会長）記

なお、御遺影は奥様から選んでいただき、お借りしました。ここに記して感謝を申し上げます。

2004年度第2回評議員会議事録

日時：2005年2月20日（日） 15:00～17:00

場所：千葉県立中央博物館 講堂

議長：犬塚則久

出席者：熊井久雄（会長）、犬塚則久、岩田修二、上杉 陽、遠藤邦彦、大村明雄、奥村晃史、小野 昭、河村善也、菊地隆男、公文富士夫、鈴木毅彦、土 隆一、永塚鎮男、兵頭政幸、松浦秀治、真野勝友、山崎晴雄、中川庸幸（春恒社）、委任状14通

熊井久雄会長挨拶の後、犬塚則久評議員を議長に選出し、以下の報告と審議が行われた。

・報告事項

1. 2004年度事業中間報告

1-1 庶務

(1) 会員動向（2005年1月31日現在）

正会員1689名（うち、学生会員51名、海外会員18名を含む）、名誉会員4名、賛助会員13社、団体会員97団体、総計1803。逝去会員：坂本亨会員（2004年5月16日逝去）、那須孝悌会員（元評議員、2004年11月25日逝去）、柴崎達雄会員（元評議員、2005年1月4日逝去）。

(2) 日本学会事務センター破産後の対応：（財）日本学会事務センターが2004年8月17日に破産し、幹事会で暫定的に学会業務をおこなうことが8月28日の総会で承認され、以下の措置をとった：会費振込用に郵便振替口座を開設した。入退会、住所変更などは庶務幹事と幹事長が対応した。投稿原稿は編集書記受付とした。要旨集、バックナンバーの販売等は休止した。団体会員あて請求書の発行は休止した。在外会員向け説明文を発送した。破産管財人より会計書類、会員データを回収した。メーリングリスト、ホームページ、「第四紀通信」による会員への事情説明をおこなった。緊急科研費（出版助成）を申請した（不採択）。学会ユーティリティセンター倒産にともない、保管バックナンバーを一部処分した。会誌発送先データを印刷所へ渡し、発送業務を依頼した（43-5、43-6）。債権者集会（2004.11.29）へ出席した。

(3) 新委託先の選定：10月の幹事会で新委託先（春恒社）を選定し、11月に評議員信任投票により承認、12月幹事会で決定した。12月1日付で（株）春恒社と契約、事務局を移転した（会則の事務局所在地については次年度総会で変更の必要がある）。破産管財人が購読者への請求権を放棄したため、購読者への代金請求を開始した。会員データ引き継ぎの結果、約200名が会費未納、会誌の発送停止となっている。

(4) 破産被害学会連絡協議会・和解交渉委員会：2004年11月27日に標記協議会が発足した。一方、11月29日の第1回債権者集会席上で、旧理事長らより損害賠償として計5000万円程度の支払い申し出があり、破産管財人から旧理事長らから預託を受けた金員について「和解交渉委員会」が発足した。これに対し学会としては協議会に参加

するとともに和解に応ずると回答した。

(5) 2004年度第1回評議員会を2004年8月27日に山形大学において開催した。出席者22名、委任状21通。議長：松島義章。2004年度総会を2004年8月28日に山形大学において開催した。議長：岡田篤正。これらの詳細は、議事録として第四紀通信11巻5号に掲載した。

(6) 引用許可の受付、会員名簿整理、寄贈図書の受付を行なった。

(7) 学会・シンポジウム・講演会等の共催、後援：地球惑星科学関連学会2004年合同大会（共催）2004年5月9-13日（千葉）、第19回ヒマラヤ・カラコルム・チベットワークショップ（後援）2004年7月10-12日（ニセコ）、第48回粘土科学討論会（共催）2004年9月16-18日（新潟）、日本学術会議第四紀学専門委員会シンポジウム「私たちの明日を考える：地球史が語る近未来の環境」（共催）2004年11月28日（東京）

(8) 日本学術会議の会員候補者情報提供：評議員選挙による上位者（女性、若手、地方在住者数などの要件を満たす）に地球惑星科学連合との共通候補者を加え、候補者カードの作成を依頼し提出した。

(9) 2005年日本第四紀学会論文賞に向けて、論文賞選考委員の選挙を行なった。熊井久雄会長から推薦された11名の候補者に対して、評議員による選挙を行なった。また、会員に向け受賞候補者の推薦を依頼した。

(10) 2005-2006年度評議員・役員選挙へ向け、選挙管理委員会発足の準備をおこなった。

(11) 日本学術振興会へ科研費審査委員候補者情報提供にあたり、評議員へ地質学、地理学、考古・人類・土壌、古生物・動・植物、その他（地物・地化・工学）各分野について推薦（投票）を依頼した。

(12) その他：事務局より各団体会員（実質は購読扱い）あて各団体の指定するフォーマットで請求業務をおこなった。事務局にて会費納入状況を改めて確認の上、会費未納者へ請求をおこなった。

1-2 編集

(1) 第四紀研究43巻5号（原著論文2編、短報5編、書評2編、72頁）、6号（原著論文3編、短報2編、書評3編、74頁＋総目次）を刊行した。44巻1号は原著論文2編、短報3編、総説1編で編集済、2月1日刊行。

(2) 「第四紀研究」の発行部数は現在2100部だが、会員数の漸減、保管場所の問題、残部の将来における処理経費を考え、第44巻から2000部に変更した。

(3) 2004年8月の山形大会シンポジウム特集号編集委員会の設置が承認された。委員は陶野郁雄・山野井徹・八木浩司・川邊孝幸（以上山形大学）、小野 昭・池原 研（編集幹事）、綿引裕子（編集書記）。44巻3号（2005年6月刊行）を特集号に宛てる予定で編集を進めている。

(4) 印刷所から第43巻5号のPDFファイル（印刷用）をサンプルとして入手した。PDFファイルの配

付ならびに公表の方法は著作権問題と直接に関連するので、引き続き検討・審議する。

- (5) 完成度が低い掲載不可になる論文もあり、査読や修正に長い時間がかかる論文もいくつか見受けられる。日本語の文章表現のまずさの克服も含めて今後、良く推敲された原稿の投稿を積極的に呼びかける必要がある。山形大会においては、その取り組みの一環として編集委員会ブースを設け、原稿の受付から刊行に至る流れを示し、分かりやすく明快な原稿・図表の作り方などを解説した。

1-3 行事

- (1) 日本第四紀学会2004年大会を山形大学において2004年8月27日～30日に開催した。8月27日～28日に一般研究発表を行い、口頭36件、ポスター32件、合計68件の研究発表が行われた。また27日夕方に評議員会、28日に総会を行った。8月29日には、「活構造と盆地の形成」のシンポジウムを開催し、8件の発表が行われた。また、28日の午後には、山形国際ホテルにおいて、普及講演会「活火山と活断層、山形は大丈夫？」を山形県と共催した。大会の参加者は、実行委員を除いて、163名、シンポジウムでは、138名、普及講演会では310名であった。また、8月29日～30日に巡検「新庄・山形盆地のテフロクロノロジーと活断層」を実施し、定員満杯の盛況であった。
- (2) 日本第四紀学会2005年大会の準備を行った。大会は、島根県松江において、一般研究発表・総会を2005年8月26日(金)と27日(土)に、シンポジウムと普及講演会を8月28日(日)に、野外見学会は8月29日(月)に開催予定で準備が進められている。実行委員会は島根大学を中心とする会員。シンポジウムについては「汽水域における完新世の古環境変動：人為と自然(仮題)」を軸に検討されている。

1-4 広報

- (1) 「第四紀通信(QR Newsletter)」Vol.11-5(2004年10月)、Vol.11-6(2004年12月)およびVol.12-1(2005年2月)を刊行した。
- (2) 学術情報センターのインターネットWWWサーバ上の日本第四紀学会ホームページを通じて広報活動を行った。
- (3) 「第四紀通信(QR Newsletter)」のVol.11-5、Vol.11-6、Vol.12-1を、それぞれ発行前月の中旬に日本第四紀学会ホームページに掲載した。
- (4) 一般会員への広報を目的とするメーリングリストと、幹事会事務連絡のためのメーリングリストを開設した。一般会員用のメーリングリストでは主に緊急を要する内容に絞って広報活動を行った。

1-5 渉外

- (1) 地球惑星科学関連学会合同大会・連絡会
＜2005年合同大会＞第四紀学会が提案するレギュラーセッション「第四紀」が継続される。また、

地震学会・地質学会と共同提案のレギュラーセッション「古地震と活断層」も引き続き開催され、第四紀学会を中心に運営される予定である。今年から5日間の開催となるため、多数の発表と参加を期待する。会期：2005年5月22日(月)～26日(金) 会場：幕張メッセ国際会議場。各種オンライン手続きの日程：1. 予稿集原稿 受付開始1月11日 早期締切：2月14日、最終締切：2月21日。2. 大会参加登録 受付開始：1月11日 締切：4月13日。上記受付登録は、すべて合同大会公式web site (<http://www.epsu.jp/jmoo2005/>)で行う。

- ＜地球惑星科学関連学会連絡会＞2004年10月12日に東京大学地震研究所にて開催され、2004年合同大会の会計報告、2005年合同大会の準備状況などについて審議され承認された。
- ＜連携のあり方に関する検討ワーキンググループ＞2004年6月19日、7月24日、10月30日の3回の会合を通じて地球惑星科学関連学会の連携について議論し、日本地球惑星科学連合設立準備会の設置を承認した。
- ＜日本地球惑星科学連合設立準備会＞2004年10月30日に発足し、12月4日、2005年1月10日、2月5日に会合を開いて、新しい日本学術会議会員に関わる情報提供への対応、連合の組織・体制、運営方針について審議を行った。2005年5月下旬の地球惑星科学関連学会合同大会において日本地球惑星科学連合を発足させるべく、規約を定め最終的な準備を進めている。
- (2) 自然史学会連合関連：2004年12月4日に国立科学博物館新宿分館資料館にて自然史学会連合総会が開催され、決算報告・ホームページ・地域博物館での研究活動などの報告と、予算・2005年度のシンポジウム開催の是非などについて審議が行われた。また、同日午後は、シンポジウム「日本の自然史－多様な生き物たちのエピソード－」が開催された。
- (3) 国際地球惑星年(IYPE)：国際地球惑星年(IYPE)の国内委員会が9月18日に千葉大学で開催され、今後の活動が討議された。日本学術会議の古生物学県連と第四紀学専門委員会が秋にそれぞれ開催予定のシンポジウムがIYPE関連として承認された。なお、秋に予定されていたIYPEの国連への提案が、今年は見送られ、IYPEの開催年がいつになるか未定のため、12月に予定していたIYPE国内委員会主催の国内シンポジウムを急遽中止した。なお、ロゴマークから2005-2007を削除し、国際ニュースレターは2005年から発行される。
- (4) 地質科学関連学協会、地球環境科学関連学科協議会：報告事項なし。

1-6 企画

- (1) 「ナウマンゾウがいた頃」というテーマのシンポジウム(従来ミニシンポジウムと呼んでいたものを改称)を企画し、千葉県立中央博物館と共催で2005年2月20日(日)に同博物館で開催した。このシンポジウムは、千葉県袖ヶ浦市吉野田の約20万年前の地層(下総層群清川層)から最近発

見されたナウマンゾウ化石やそれに伴う多数の化石の研究成果と、これらの化石の産出層とそれに関連する地層の研究成果をまとめて発表するために、同博物館が中心となって企画されたものである。研究発表は9題で、そのあとに総合討論が行われた。シンポジウムでは化石そのものばかりでなく、古環境や古生態についても詳しい研究発表が行われており、第四紀の研究として大変興味深いシンポジウムで、ナウマンゾウがいた頃の日本の自然環境や生物相についての理解が深まった。

- (2) 日本第四紀学会講習会を、2005年5月または6月の土曜または休日に行うための準備を進めている。テーマは「第四紀脊椎動物化石の研究法」で、会場は大阪市立自然史博物館を予定。会場や標本、器具の都合で募集人員は20名程度になる予定で、内容や詳しい予定については同博物館の樽野博幸氏と打ち合わせ中。2月末までに詳細を決め4月に発行される第四紀通信で講習会を会員に周知したい。

(質疑) 庶務報告の会員数について、減少の特徴について質問があり、幹事会より、学会事務センター破産が契機になってやめた会員がいること、また長年会員であった方が退職などを契機にやめる例も目立っており、学会として何らかの対応が必要との回答があった。

2. 2004年度会計中間報告

松浦会計幹事より、別紙資料(省略)に基づき2004年12月31日現在の会計中間報告があった。会費収入に関しては学会事務センターの倒産で5ヶ月近く会費徴収業務が停止したため、前年に比べ大幅に納入率が低下した。事務機能が回復したので未納の会員は会費納入を行って欲しい。団体会員や誌代も請求業務が停止していたため12月末の時点では収入が対前年比で大幅に低下しているが、業務再開で今後回復する。学会事務センターへの預け金3,254,365円は未回収債権となっているが、回収の見込みがないため、帳簿上は債権としての繰り越しはせず、本年度の損出金として処理することとした。支出は印刷費等順調に執行されている。

(質疑) 損出金として処理すると、来年度以降、この数字は消えてしまうので、債権回収は不可能としても、今回の事件で学会が損害を被ったという記録を会計上見える形でこれからも残しておく必要があるのでは、という意見があり、今後も会計報告の欄外に損失金の記録を留めるとの回答があった。

3. その他

3-1 日本学術会議地質科学総合研究連絡委員会第四紀学専門委員会報告

岩田第四紀学専門委員会委員長より、8月の評議員会以後の活動について報告があった。

- (1) 9月3日に第19期第5回、11月28日に第6回の委員会を開催した。以下その内容を報告する。

2005年度に発足する日本学術会議の新体制については、新会員選出のための30人の会員候補者選考委員が選定され、そのもとに100名弱の選

考を補佐する専門委員が選ばれた。地質・地球科学関係では、久城育夫氏が選考委員長となり、その下に3人の専門委員(河野 長・平 朝彦・鎮西清高の諸氏)が選ばれた。一方、各学協会には学術会議会員にふさわしい人の情報提供が求められた。

新地質年代表における「第四紀」の削除問題について「第四紀」を削除すべきではないという本委員会の意見を、英文の文書にして国際第四紀学連合・国際地質学会などに送った(和文文書は「第四紀通信」に載せた)。

2005年春に地質科学総合研究連絡委員会環境地質学専門委員会を中心に、都市の環境に関するシンポジウムを開催することになった。

シンポジウム「関東平野の形成史 - 最近のテフラ・地下地質・テクトニクス研究に基づくその探究 -」(平成17年3月13日(日)午前9:20-午後17:00明治大学駿河台キャンパスアカデミーコモン9階)を日本第四紀学会テフラ・火山研究委員会とともに主催することにした。

- (2) 2004年11月28日に明治大学アカデミーコモンで「私たちの明日を考える：地球史が語る近未来の環境」を日本第四紀学会とともに主催した。100名ちかくの参加者があった。このシンポジウムの内容にもとづいて、東京大学出版会から一般向けの単行本を第四紀学会50周年記念事業の一環として出版する。

3-2 日本学術会議古生物研連報告

河村企画幹事(古生物研連委員)より古生物博研連の活動状況について報告があった。

3-3 50周年記念事業実行委員会報告

山崎幹事長より委員会の活動状況について以下の報告があった。2004年度前期は8月の学会事務センターの破産などの事件があり、庶務関係の対応で多忙を極めたため委員会開催できなかった。しかし、普及書作成についてはWG(50周年第四紀電子出版委員会、委員長：遠藤邦彦会員)を設立し、内容の具体的な検討に入った。また、第四紀学研連主催のシンポジウム「私たちの明日を考える：地球史が語る近未来の環境」を50周年記念事業の一環として2004年11月に明治大学において実施した。なお、博物館特別展示に関しては、大阪市立博物館の特別展示内容に変更があったため、2006年の共催は困難になった。現在、代替措置を検討中である。また、現在幹事会の中で、50周年記念事業として、創刊以降の「第四紀研究」全巻についてPDFの作成、配布を検討中である。第四紀地図改訂、国際シンポジウム、記念セレモニーについては進展がなく、具体案の策定が必要である。

3-4 旧石器遺跡捏造関係資料調査報告

小野編集幹事より「第四紀研究」に関わる旧跡遺跡捏造関係資料の調査結果が報告された。幹事会の中に設置した調査委員会(委員：小野 昭・佐藤宏之・伊藤 健・諏訪順・鈴木毅彦)が、日本第四紀学会が関係した旧石器捏造事件関連資料を調査し

たもので、1978年1月から2001年12月までの関連する文献等をリストアップし、関連の程度によって関連度A～Cのランクに分けている。このリストは会長名の前文を付けて第四紀研究および第四紀通信に掲載予定である。

3-5 学会倫理憲章策定委員会報告

上杉倫理憲章策定委員会委員長より、委員会の活動についての報告があり倫理憲章策定委員会規約(案)作成についてと今後のスケジュールについての説明があった。2005年6月に原案を第四紀通信に掲載して広く会員の意見を求め、8月の評議員会にて倫理憲章草案を審議し、最終案を総会に諮る予定である。

・審議事項

1. 論文賞選考委員の承認

岩田修二、福澤仁之、辻 誠一郎、兵頭政幸、阿部祥人の各会員を論文賞選考委員として承認した。

2. 選挙管理委員の承認

植木岳雪、白井正明、大石雅之、及川輝樹、江口誠一、近藤 恵の各会員を選挙管理委員として承認した。

3. 50周年記念事業の募金について

幹事会より、50周年記念事業のうち、とくに国際シンポジウム実施に関わる外国人招聘のための経費等に使用するため、会員を対象とした募金活動を行いたいとの提案があり、審議の結果承認された。趣旨は下記の通りで、8月の総会で正式に提案される。

日本第四紀学会 50周年事業に関わる募金の実施について

日本第四紀学会では2006年4月に創立50周年を迎えることから、50周年記念事業実行委員会を発足させて準備活動を進めているところです。この事業では、記念出版物の刊行、記念式典、記念シンポジウム、国際シンポジウムの実施等を検討しています。財政的に非常に厳しい折、諸行事はできるだけ簡素に、そして受益者負担の原則で実施する所存ですが、国際シンポジウムにつきましては2007年INQUA大会の招致を逃したこともあり、日本の第四紀学を世界へ展開させるために、そして、アジア地域の第四紀研究との連携をはかるため、アジア各国の代表を招いて21世紀にふさわしい会合を開催したいと思います。しかし、INQUAや各国の代表を日本に招待するためには、その旅費及び滞在費を日本第四紀学会が負担する必要があります。この金額は15名程度を招待するとしても、一人あたり30万円、合計450万円程の資金が必要です。その他の記念事業でも受益者負担とは言え、不足額が生じた場合は第四紀学会が資金提供を行う必要があります。本年秋には国際研究集会開催の科研費申請を行う予定ですが、競争が激しい中でどれだけの資金が確保できるか不透明です。また、ご承知のように、2004年8月の(財)日本学会事務センターの

破産により日本第四紀学会は預け金約320万円の回収が不可能になりました。このため学会ではこれまでの資産を取り崩して学会運営に充てている状況であり、記念事業のための資金を捻出することは財政的に不可能です。このため、幹事会では国際シンポジウムを含めた50周年記念事業の実施に必要な資金を得るため、下記の要領で募金を実施いたしたく、評議員会に提案する次第です。

記

募金目標：500万円(1口5000円)2口以上納入する方には記念品贈呈(第四紀研究全巻PDFなど)呼びかける対象：日本第四紀学会会員
スケジュール：評議員会で承認の後、2005年総会で提案し、可決されたら9月から募金開始

4. その他

4-1 論文別刷料金の件

編集委員会から論文別刷りの無料部分廃止について以下の提案があり、審議の結果承認された。

論文別刷りについては現在「50部については学会が負担」(投稿規定8条)し、無料である。しかし、学会経費の負担を軽減するために、現行の50部まで無料を止め有料とする。代わりに「100部以上申し込んだ場合は、その内の50部分について学会が費用を負担する」を加える。料金表は別に定め、実施は45巻1号(2006年2月)からとする。

4-2 日本地球惑星科学連合加盟の件

奥村渉外幹事より地球惑星連合加盟についての提案があり、審議の結果日本第四紀学会は地球惑星連合に加盟することを承認した。

2004年度第4回幹事会議事録

日時：2005年1月29日(土)14:00～17:00

会場：早稲田大学教育学部16-512演習室

出席者：熊井久雄(会長)、真野勝友(副会長)、山崎晴雄、松浦秀治、小野 昭、池原 研、斎藤文紀、兵頭政幸、河村善也、久保純子(記録)

議 事

I. 報告事項

(庶務)

(株)春恒社との契約書を確認した。事務局移転に伴い、会則の修正が必要となる(2005年度総会)。

論文賞選考委員選出について、会長が候補者(11名)を推薦し、評議員による投票により5名選出する予定。

会員による論文賞推薦受付の件は、「第四紀通信」に掲載すべきところ間に合わなかったため、メーリングリストや学会ホームページで会員に周知する。

(会計)

学会口座の状況報告。

(行事)

山形大会の会計報告が届いた。

II. 審議事項

(庶務)

日本学会事務センター破産管財人より送付された、元理事長らに対する「和解交渉委員会」に対する回答(1月31日回答期限)について審議し、「破産管財人が元理事らから預託を受けた約5000万円の金員での和解に」応じること、また、約5000万円の分配方法については「預かり金残高の割合に応じて」分配するよう回答することとした。

日本学術振興会の科研費審査員の選考方法が変更となり、学術会議からの推薦を廃止し、選考委員会が研究者データベースを元に選考することとなり、このデータベースに対し、各学協会が情報提供することが依頼された。この「情報提供」をどのように行うか審議した結果、評議員に分野ごとに複数名の推薦(投票)を依頼し、そこから候補者を選出し、本人へ情報提供を依頼することとした

(従来の評議員による投票を踏襲した)。

2月20日評議員会議長候補選出の件は、出欠回答をもとに協議することとした。

選挙管理委員候補者を選出した。

(会計)

2004年12月31日現在の中間報告(評議員会資料、事務局作成)を確認した。このうち、学会事務センター預け金損失分(約325万円)は「債権」ではなく、本年度損失金として処理することとした。

(編集)

別刷代の「50部無料」を見なおし、100部以上注文の場合は50部を無料とする案を示すこととした。

(渉外)

地球惑星科学連合の参加について、2月の評議員会で承認をうけることとした。

50周年記念事業の募金について審議した。

III. 評議員会資料の作成・確認

2月20日開催予定の評議員会資料の作成、確認をおこなった。

次回幹事会は2005年2月20日(千葉県立中央博シンポジウム)昼休みの予定。

第四紀通信に情報をお寄せ下さい

第四紀通信の原稿は随時受け付けております。
広報幹事：兵頭政幸(mhyodo@kobe-u.ac.jp)宛にメールでお送り下さい。
第四紀通信は奇数月上旬原稿締め切り、偶数月1日刊行予定としていますが、情報の速報性ということから、版下が完成した段階でホームページに掲載するよう努力しています。奇数月15日頃にはホームページにアップするようにしていますのでご利用下さい。

日本第四紀学会広報委員会 神戸大学内海域環境教育研究センター 兵頭政幸
〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 電話 078-803-5734 Fax 078-803-5757
広報委員：松下まり子・後藤秀昭 編集書記：岩本容子

第四紀学会ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/qr>から第四紀通信バックナンバーのPDFファイルを閲覧できます。